

「え？まだ授業受けてるの？」——。ふと目にした広告をしない塾なのに生徒数がうなぎ登りに増えている。人気の理由はマラソンのペースメーカーのようにつききりで管理してくれる点。武田塾から最新の塾トレンドを探った。

少子化なんの!! 塾業界のRIZAP



講師が受験生の学習状況を管理する（東京都文京区）

基本は自習

御茶ノ水駅から徒歩5分ほど、武田塾の教室に入ると、黙々と自習に取り組む十数人の生徒たちの姿。講師の熱血指導は聞こえてこない。教室全体が自習室のようだ。ここでは集団授業は一切行わない。個別にもほとんど教えず、あくまでも学習を「管理」するだけ。良質な市販の参考書

授業ない塾

がたぐさんあり「解説を読めば基本的に理解できる」というスタンスだ。志望する大学や学部ごとに合格に必要な参考書や問題集のリストと、取り組む順番やペースを記したフローチャートがある。それをもとに、学習コーチが週1回、2時間ほどかけてどれだけ勉強したかを聞き取る。1週間でもこれを1日何ページこなすか計画書を作る。ある生徒の英語の計画書はこんな感じだ。受験生におなじみ「英単語ターゲット」の単語を800個覚える。平日4日間をかけて1日200個ずつ暗記し、土日に800個を総復習。週明けに確認テストを実施する。1。コーチが採点し、8割以上正解できなかったら次の週も同じ内容を繰り返す。ポリシーは「できる」にこだわられ、「回

林尚弘塾長

異能マーケティング



教よりも正解率だ。不安な生徒には月3万4万円プラスで、管理が強い「義務自習」というコースがある。決められた時間に自習室にいないとコーチから電話がかかってくる。それでも来ないと保護者に連絡をとるといった徹底ぶり。生徒の平均単価は月6万5千7万円。決して安くはないが「自分1人

で勉強するのは不安」という生徒の間で口コミが広がり、足元の生徒数は4000人この2年間で2・4倍に増加。今春は慶応・早稲田大や北海道大医学部など145人の合格者を輩出した。管理してくれるとはい

沼電也さん（19、浪人1年）は現役生の頃、映像講義を視聴する形式の大手学習塾に通った。1日10時間ほど映像講義を見続けたが「受けっぱなしになっていった」。第1志望の早稲田大政治経済学部は不合格。4月、友人の紹介で武田塾の門をたたいた。週1回、コーチと学習計画の擦り合わせや確認テ

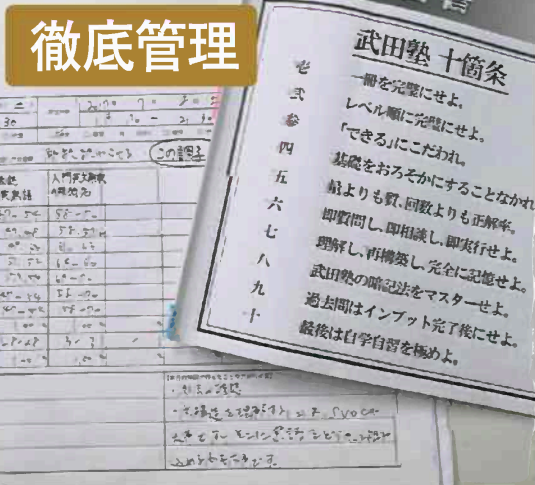
「確認テストがある。勉強するよつな、気合のある生徒が少なくなっている」といつ。安定志向が強まるなか、事細か

ある教育業界関係者は武田塾を「塾業界のRIZAP」といつ。RIZAPも、目標に達するまでずっと寄り添って徹底的に管理する。

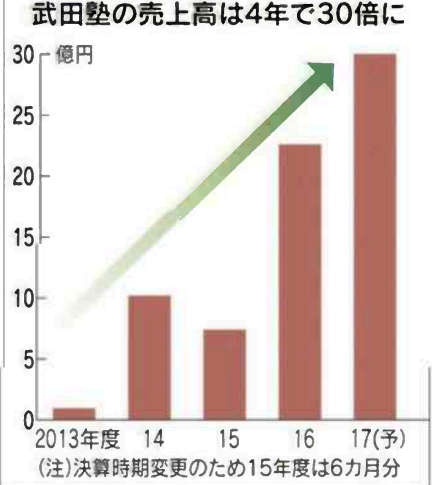
林塾長は「自分で進んで勉強するよつな、気合のある生徒が少なくなっている」といつ。安定志向が強まるなか、事細か

「武田塾」だ。自主学習という点で、半世紀以上前に公文教育研究会（大阪市）が生み出した「公文式」にも通じるような汎用性が高まれば「第四の波」となるかもしれない。（寺井浩介）

市販の参考書極める 習慣づけにコミット



徹底管理
武田塾十箇条
一冊を完璧にせよ。レベル別に完璧にせよ。「できる」にこだわれ。基礎をおろそかにすることなかれ。船よりも質。回数よりも正解率。船よりも質。回数よりも正解率。即解し、再確認し、完全記憶せよ。武田塾の暗記法をマスターせよ。過去問はインプット完了後にせよ。最後は自習自習を極めよ。



ど、勉強が習慣化できている」といつ。創業は2004年12月。きっかけは林尚弘塾長（32）自身の苦い体験だ。高校1年生から週3回学習塾に通ったが、現役で受験した3大学はすべて不合格。浪人時代も偏差値はなかなか伸びず、秋になっても偏差値は50程度だった。

受験前の3カ月間は参考書を中心に家庭での学習に切り替えたところ、「学力が急激に伸び」、学習院大に進学した。経験から得たのは「予備校の授業を多く受けるより、問題集1冊を完璧にするほうが成績が伸びる」といつ。大学1年時に起業に思い至り、運営母体となるA・V・E（東京・文京）を設立しお茶の水に塾を開いた。

1年目から模擬試験でE判定だった生徒が慶応大、早稲田大など難関校に合格。「これはいい」と確信し、3年ほど前から「授業をしない」を学習塾のスタンダードにした」といつ。

この1、2年で急速に押し寄せた「第三の波」がIT系だ。代表的なのがリクルートマーケティングパートナーズ（東京・中央）の「スタディサプリ」。カリスマ講師の授業動画などを月額980円から提供。スマートフォン（スマホ）片手に賢く安く学ぶスタイルが浸透する。スマホゲームで遊びながら学ぶ商品も6月に登場した。学研プラス（東京・品川）の参考書「APPIIS」で、8月中旬までに約4万8000部売れた。そして最新トレンドが「武田塾」だ。自主学習という点で、半世紀以上前に公文教育研究会（大阪市）が生み出した「公文式」にも通じるような汎用性が高まれば「第四の波」となるかもしれない。（寺井浩介）

自習 > スマホ > 個別 > 集団

塾・予備校に「第四の波」

学習塾は戦後日本の経済成長と歩みを共にしてきた。少子化にもかかわらず各家庭における教育費は増えており、市場は伸びている。全日本学習塾連絡会議の「学習塾百年の歴史」によると、学習塾が増え始めたのは1950年代後半。60年代にかけて私学入試への要望が高まり、65年には「乱塾時代」といつ言葉も生まれた。71〜74年の「第2次ベビーブーム」が、80年代に入り生徒数の増加に拍車をかけた。駿台予備学校、河合塾、代々木ゼミナールが全国展開を加速したのもその頃。予備校熱がマックスに達した。「第二の波」が訪れた

にさらに成長した。01年に早稲田アカデミーが個別指導に参入するなど集団に強い塾も追いついた。「今でしょ！」で知られる林修先生を輩出したナガセの「東進衛星予備校」が00年代に急成長したのも、個別シフトの流れにある。有名講師の素質な講義を、子ども一人ひとりが自分の都合に合わせていつでもどこでも映像講義を視聴できるモデルが開いた。いまや東大現役進学者の約3人に1人が東進の授業を経験している。